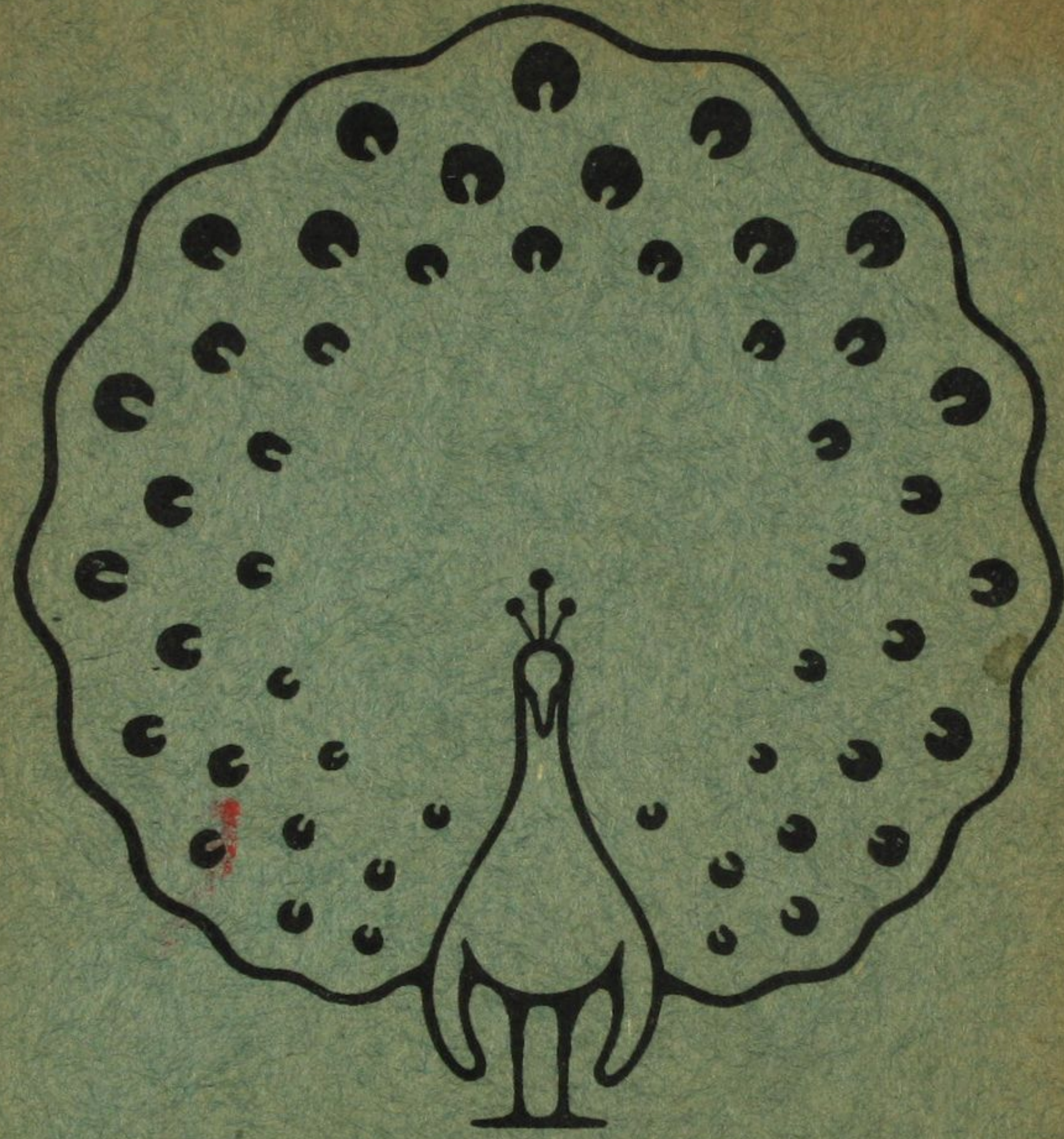


伊良子清白著



詩集

孔雀船





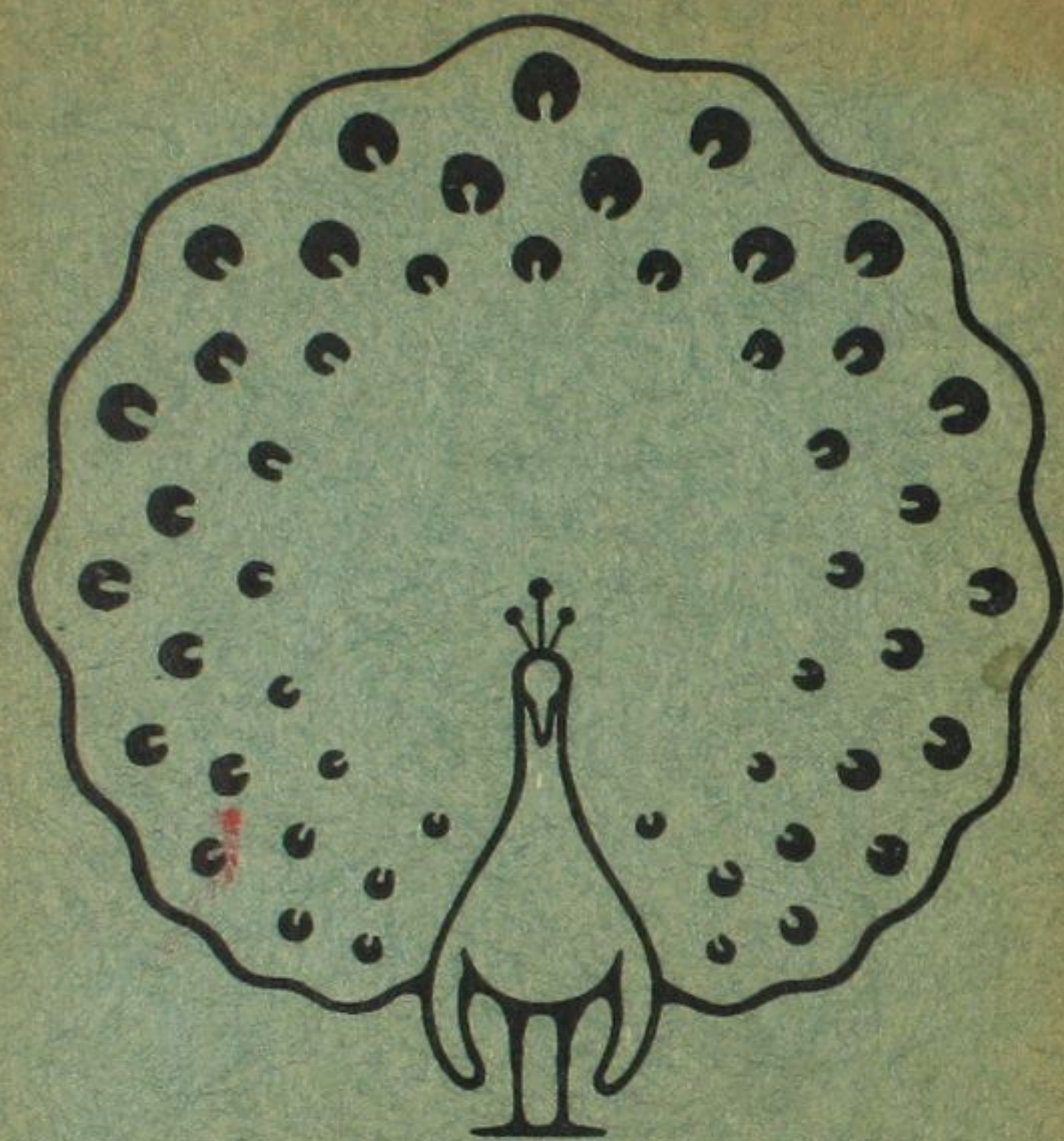
孔雀船

伊良子清白著





伊良子清白著



詩集

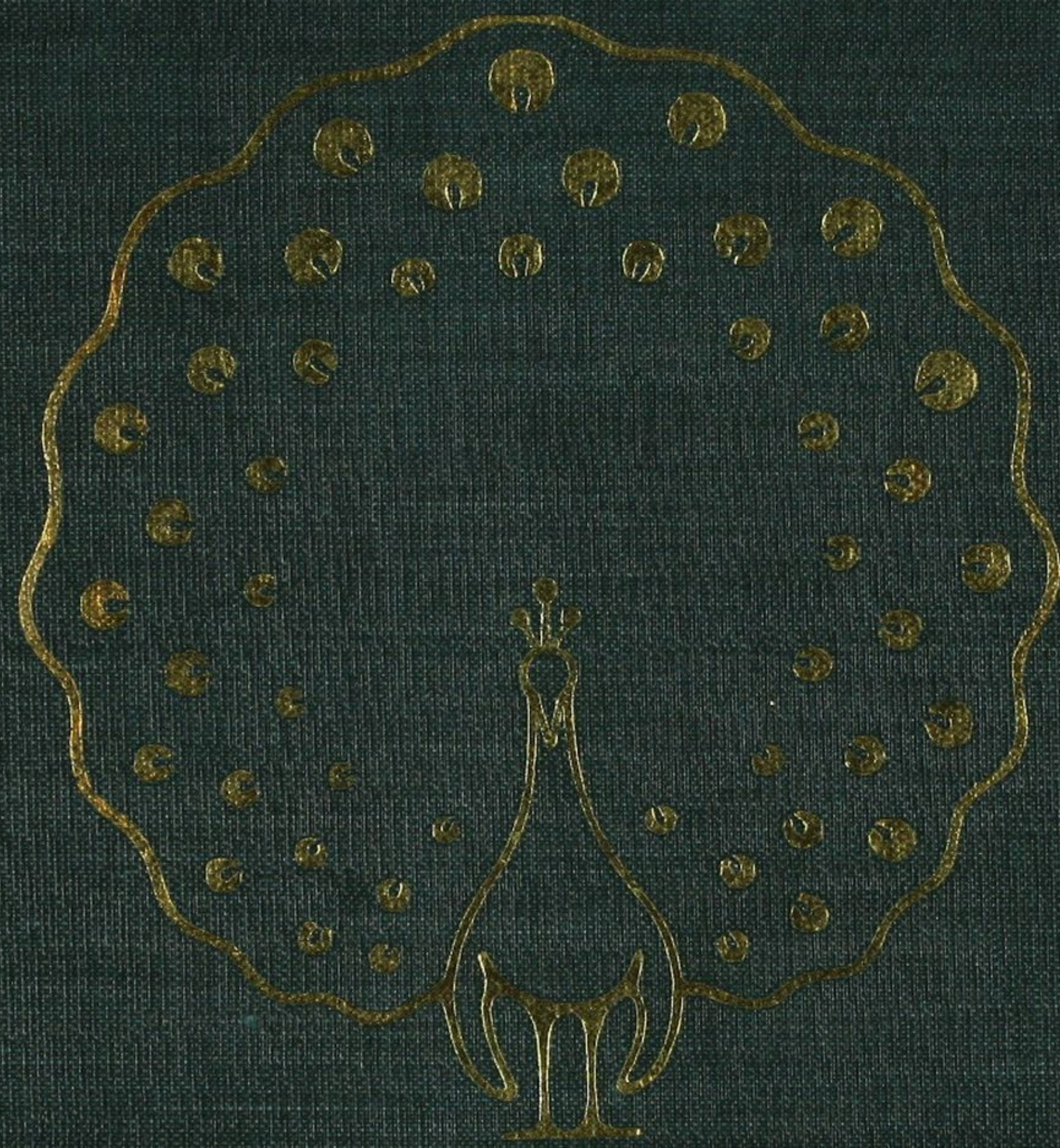
孔雀船



孔雀船

伊良子清白著



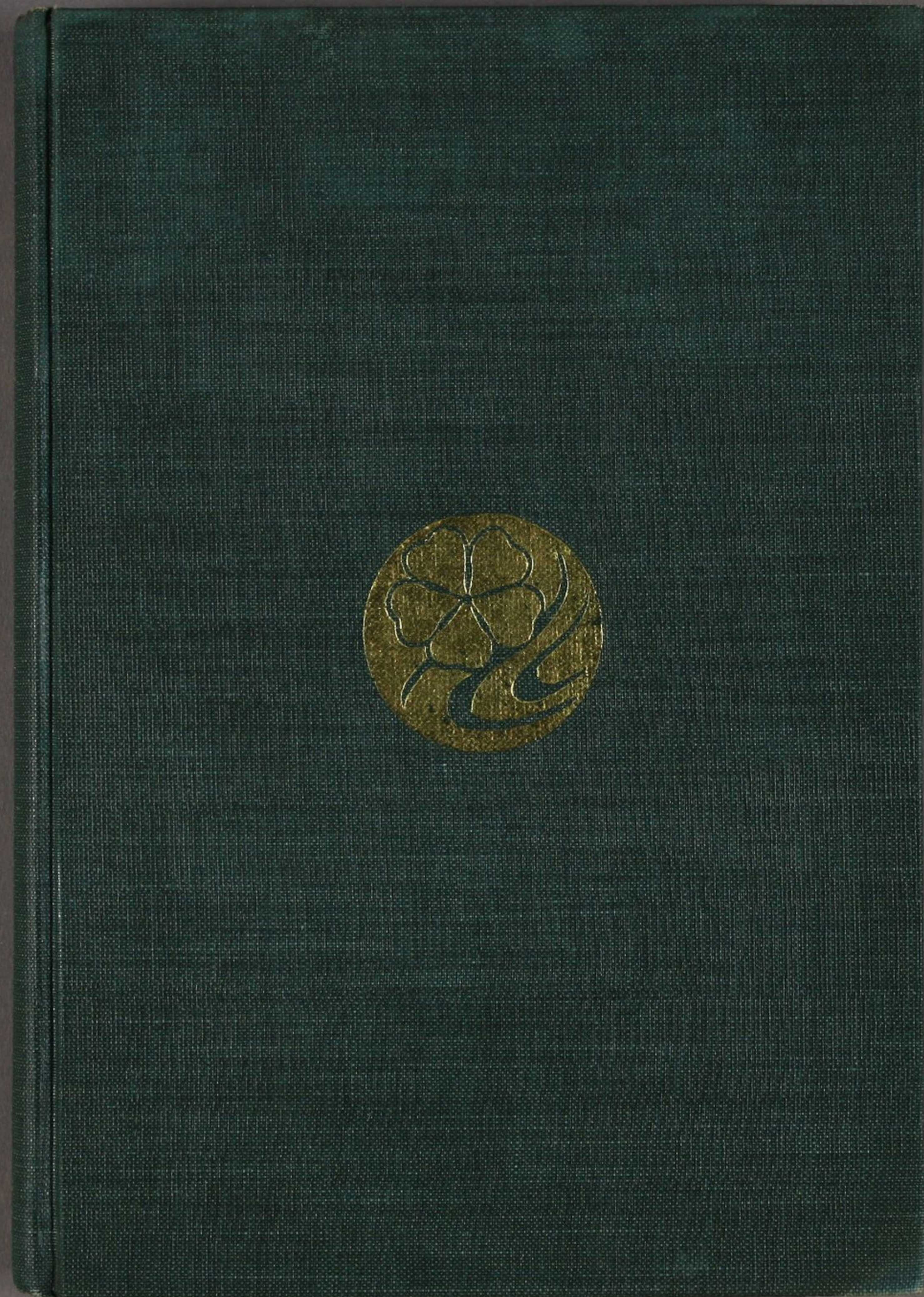




孔雀船

伊良子清白著



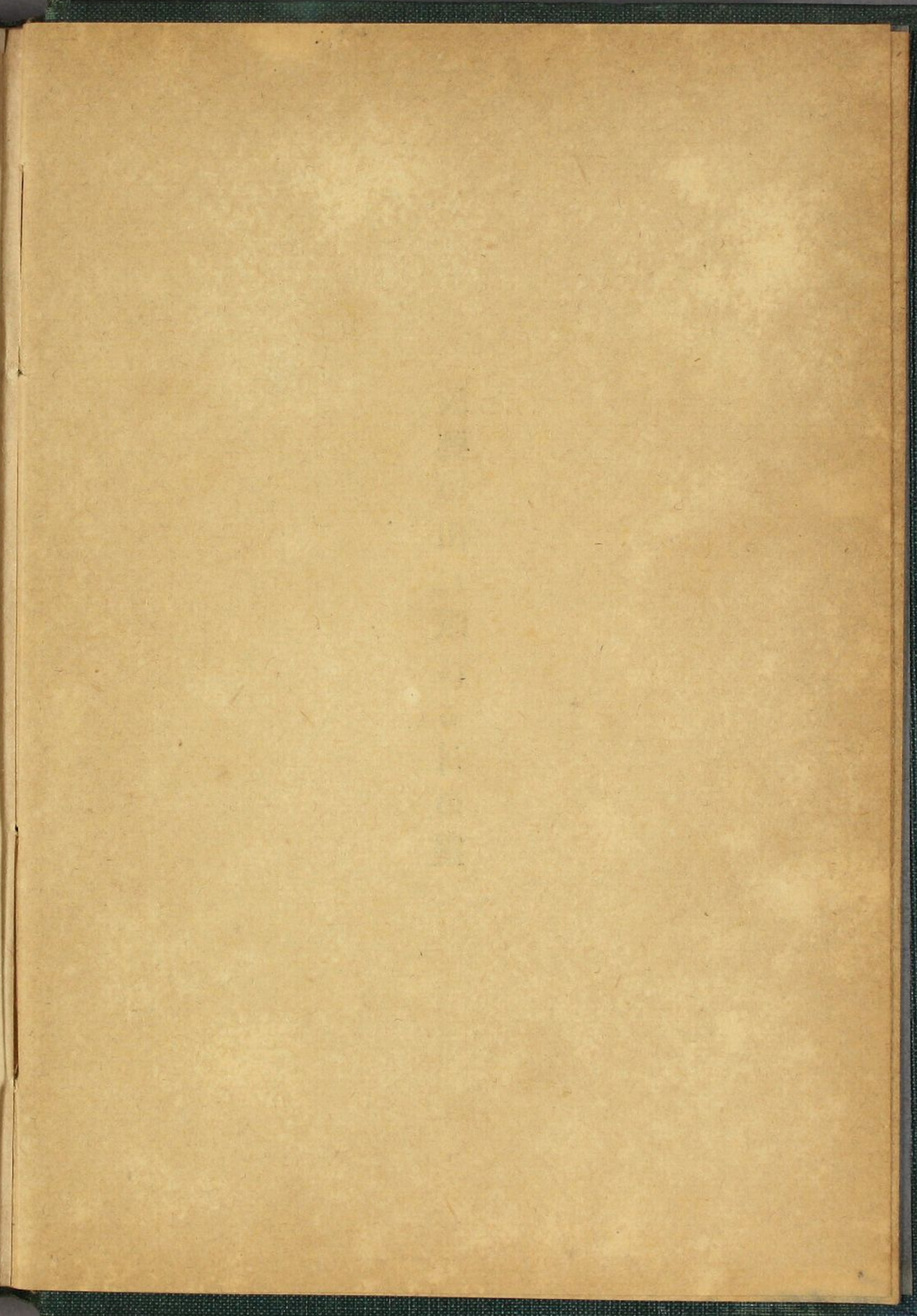




孔雀船

伊良子清白著

故郷の山に眠れる母の靈に





目次

漂泊	……	一
淡路にて	……	七
秋和の里	……	二
旅行く人に	……	五
島	……	六

海の聲	二〇
夏日孔雀賦	二五
花賣	三二
月光日光	三八
華燭賦	四九
五月野	五三
花柑子	五三

不開の間	一三六
安乗の稚兒	一四六
鬼の語	一五〇
戯れに	一五二
初陣	一六〇
駿馬間答	一六六
通計拾八篇	

孔雀船

漂泊

河添の旅籠屋さびし
秋風吹いて
荻戸に

伊良子清白著

哀^{あは}れなる旅^{たび}の男^{おとこ}は
夕暮^{ゆふぐれ}の空^{そら}を眺^{なが}めて
いと低^{ひく}く歌^{うた}ひはじめぬ

亡^{なき}母^{はは}は

處^{ところ}女^めと成^なりて

白^{しろ}き額^{ぬか}月^{つき}に現^{あら}はれ

亡^{なき}父^{ちち}は

童^{わら}子^はと成^なりて

圓^{まる}き肩^{かた}銀^{ぎん}河^がを渡^{わた}る

柳^{やなぎ}洩^もる

夜^よの河^{かは}白^{しろ}く

河^{かは}越^こえて煙^{けぶり}の小^を野^のに

かすかなる笛の音ありて
旅人の胸に觸れたり

故郷の
谷間の歌は
續きつゝ断えつゝ哀し
大空の返響の音と

地の底のうめきの聲と
交りて調は深し

旅人に
母はやどりぬ
若人に
父は降り

小野の笛煙の中に
かすかなる節は残り

旅人は

歌ひ續けぬ

嬰子の昔にかへり

微笑みて歌ひつゝあり

淡路にて

古翁しま國の
野にまじり覆盆子摘み
門に来て生鈴の
百層を驕りよぶ

白晶の皿をうけ
鮮けき乳を灑ぐ
六月の飲食に
けたまし虹走る

清涼の里いで
松に行き松に去る

大海のすなどりは
ちぎれたり繪巻物

鳴門の子海の幸
魚の腹を胸肉に
おしあて見よ十人
同音にのぼり来る

秋和の里

月に沈める白菊の
秋冷まじき影を見て
千曲少女のたましひの
ぬけかいてたるこゝちせる

佐久の平の片ほとり
あきわの里に霜やおく
酒うる家のさゞめきに
まじる夕の鴈の聲

蓼科山の彼方にぞ
年経るおろち棲むといへ

月つきはろくとうかびいで
八谷やたにの奥おくも照てららすかな

旅路たびぢはるけくさまよへば
破やれし衣ころもの寒さむけきに
こよひ朗ほがららのそらにして
いとゞし心痛こころいたむかな

旅行たびく人ひとに

雨あめの渡わたしに

順禮じゆんらいの

姿すがた寂さびしき

夕間暮ゆふまぐれ

霧きりの山やま路ぢに

駕かこ昇かきの

かけ聲こゑ高たかき

朝あさ朗ほらけ

旅たびは興けうある

頭づつ陀だ袋ぶくろ

重おもきを土つ産どに

歸かへれ君きみ

悪あく魔ま木こ暗ぐれに

ひそみつゝ

人ひとの財たからを

ねらふとも

天女泉てんじよいづみに

下り立ちおろりたちて

小瓶洗こびんあらふも

目に入めいらむ

山蛭やまびる膚はだに

吸すひ入いらば

谷たにに薬水やくすい

溢あふるべく

船醉海ふねまひうみに

苦くるしむも

龍神りゆうじん臟むねを

醫すべし

鳥の戸に

火は燃えて

山に地獄の

吹嘘聲

潮に異香

薰ずれば

海に微妙の

蜃氣樓

暮れて驛の

町に入り

旅籠の門を
くゞる時

米の玄きに

驚きて

里に都を

説く勿れ

女房語部

背すりて

村の歴史を

講ずべく

主膳夫

旨うまき 雉子きを獲えて
羹あつもの
とゝのへむ

芭蕉ばせなの草鞋わらじ

ふみしめて

圓位まゐの笠かさを

頂いたげば

風俗ふうぞく君きみの

鹿島かしま立たち

翁おきなさびたる

可笑をかしさよ

島しま

黒潮くろしほの流ながれて奔はしる
沖中おきなかに漂たふよふ島しまは

眠ねぶりたる巨人きよじんならずや
頭かしこのみ波なみに出い出して

峨々ががとして岩いは重かさなれば
目めや鼻はなや顔かほ何なぞ奇きなる

裸々はだかとして樹きを被からず
聳そびえたる頂いた高たかし

鳥啼くも魚群れ飛ぶも
雨降るも日の出入るも

青空も大海原も
春と夏秋と冬とも

眠りたる巨人は知らず

幾千年頑たり嶮たり

海の聲

いさゝむら竹打戦ぐ
丘の徑の果にして
くねり可笑しくつらくに
しげるいそべの磯馴松

花も紅葉もなけれども
千鳥あそべるいさごちの
渚に近く下り立てば
沈みて青き海の石
貝や拾はん莫告藻や
摘まんといひしそのかみの

歌をうたひて眞玉なす
いさごのうへをあゆみけり

波と波とのかさなりて
砂と砂とのうちふれて
流れさゞらく聲きくに
いせをの蟹が耳馴れし

音としもこそおぼえざれ

社をよぎり寺をすぎ
鈴振り鳴らし鐘をつき
海の小琴にあはするに
澄みてかなしき簫となる

御座の灣西の方
和具の細門に船泛けて
布施田の里や青波の
潮を渡る蟹の兒等

われその船を泛べばや
われその水を渡らばや

しかず纜解き放ち
今日は和子が伴たらん

見ずやとも邊に越賀の松
見ずやへさきに青の峰
ゆたのたゆたのたゆたひに
潮の和みぞはかられぬ

和^{なご}みは潮^{しほ}のそれのみか
日は麗^{うら}らかに志^し摩^まの國^{くに}
空^{そら}に黄^こ金^{かね}や集^{つど}ふらん
風^{かぜ}は長^{のど}閑^かに英^あ虞^この山^{やま}
花^{はな}や郡^{こほり}をよぎるらん

よしそれとても海^あ士^まの子^こが
歌^{うた}うたはずば詮^{せん}ぞなき
歌^{うた}ひてすぐる入^{いり}海^{うみ}の
さし出^での岩^{いは}もほゝゑまん

言^{こと}葉^はすくなき入^{いり}海^{うみ}の
波^{なみ}こそ君^{きみ}の友^{とも}ならめ

大海原おほうなげらに男をのこらは
あまの少女をとめは江えの水みづに

さても縑かとりの衣きぬならで
船路間ふなぢま近ぢかき藻もの被衣かぎ
女をんなだてらに水底みなぞこの
黄泉國よもつくににも通かよふらむ

黄泉よみの醜女しこめは嫉妬ねたみあり
阿古屋あこやの貝かひを敷しき列つらね
顔美かほよき子等こらを誘いさなひて
岩いはの櫃ひつぎもつくるらん
さばれ海うみなる底そこひには

父も沈みぬちゝのみの
母も伏しぬ柞葉の
生れ乍らに水潜る
歌のふしもやさとりらん

櫛も捨てたり砂濱に
簪も折りぬ岩角に

黒く沈める眼のうちに
映るは海の泥のみ

若きが膚も潮沫の
觸るゝに早く任せけむ
いは間にくつる捨錨
それだに里の懐しき

哀歌をあげぬ海なれば
花草船を流れすぎ
をとめの群も船の子が
袖にかくるゝ秋の夢

夢なればこそ千尋なす

海のそこひも見ゆるなれ
それその石の圓くして
白きは星の果ならん

いまし蟹の子艦拍子の
など亂聲にきこゆるや
われ今海をうかがふに

とくなが顔は蒼みたり

ゆるさせたまへ都人

きみのまなこは朗らかに

いかなる海も射貫くらん

傳へきくらく此海に

男のかげのさすときは

かへらず消えず潜女の
深き業とぞ怖れたる

われ微笑にたへやらず

肩を叩いて童形の

神に翼を疑ひし

それもゆめとやいふべけん

島こそ浮べくろくと

この入海の島なれば

いつ羽衣の落ち沈み

飛ばず翔らず成りぬらむ

見れば紫日を帯びて

陽炎ひわたる玉のつや

つや／＼われはうけひかず

あまりに軽き姿かな

白ら松原小貝濱

泊つるや小舟船越の

昔は汐も通ひけむ

これや月日の破壊ならじ

潮のひきたる煌砂

うみの子ならで誰かまた

かゝる汀に仄白き

鏡ありとや思ふべき

大海原と入海と

こゝに迫りて海神が

こゝろなくさや手すさびや

陸を細めし鑿の業

今細雲の曳き渡し

紀路は遙けし三熊野や

白木綿咲ける海岸に
落つると見ゆる夕日かな

夏日孔雀賦

園の主あるじに導みちびかれ
庭にはの置おき石いし石いし燈籠とうろう
物もの古ふるる木こ立たち築山つきやまの
景けい有ある所ところうち過すぎて
池いけのほとりを來きて見みれば

棚につくれる藤の花

紫深き彩雲の

陰にかくるゝ鳥屋にして

番の孔雀砂を踏み

優なる姿睦つるゝよ

地に曳く尾羽の重くして

歩はおそき雄の孔雀

雌鳥を見れば嬌やかに

柔和の性は具ふれど

綾に包める毛衣に

己れ眩き風情あり

雌鳥雄鳥の立並び

砂すなにいざよふ影かげと影かげ
飾かぎり乏とほき身みを耻はぢちて
雌め鳥とりは少すこし退しりぞけり
落おち羽はは見みえず砂すなの上うへ
清きよく掃はきたる園その守もりが
箒はきの痕あとも失うせやらす
一いつ落おち散ちる藤ふぢ浪なみの

花はなを啄ついばむ雄をの孔雀くじゃく
長ながき花はな總ぶさ地ちに垂たれて
歩あゆめば遠とほし砂いさ原はら
見みよ君きみ來きたれ雄をの孔雀くじゃく
尾な羽は擴ひろぐるよあなや今いま
あな擴ひろげたりことくく
こゝろ籠こめたる武士ものぶの

晴の鎧に似たるかな
花の宴宮内の
櫻襲のごときかな
一つの尾羽をながむれば
右と左にたち別れ
みだれて靡く細羽の
金糸の縫を捌くかな

圓く張りたる尾の上に
圓くおかるゝ斑を見れば
雲の峯湧く夏の日に
炎は燃ゆる日輪の
半ば蝕する影の如
さても面は濃やかに
げに天鷲絨の軟かき

これや觸れても見まほしの
指に空しき心地せむ

いとゞ和毛のゆたかにて

胸を纏へる光輝と

紫深き羽衣は

紺地の紙に金泥の

文字を透すが如くなり

冠に立てる二本の

羽は何物直にして

位を示す名鳥の

これ頂の飾なり

身はいと小さく尾は廣く

盛なるかな眞白なる

砂すなの面おもてを歩あゆみ行ゆく
君きみそれ砂すなといふ勿なれ
この鳥影とりかげを成なす所ところ
妙たへの光ひかりを眼めにせずや
仰あふげば深ふかし藤ふぢの棚たな
王者わうじやにかざす覆蓋ふくがいの
形かたちに通かよふかしこさよ

四方よに張はりたる尾おの羽はねの
めぐりはまといふ薄霞うすがすみ
もとより鳥屋とやのものなれど
鳥屋とやより廣ひろく見みゆるかな

何事なにごとぞこれ圓まらかに
張はれる尾羽おぼより風出かぜいで

見よ漣の寄るごとく
羽と羽とを疾くぞ過ぐ
天つ錦の羽の戦ぎ
香りの草はふまずとも
香らざらめやその和毛
八百重の雲は飛ばずとも
響かざらめやその羽がひ

獅子よ空しき洞をいで
小暗き森の巖角に
その鬣をうち振ふ
猛き姿もなにかせむ
驚よ御空を高く飛び
日の行く道の縦横に
貫く羽を搏ち羽ぶく

雄々しき影もなにかせむ
誰か知るべき花蔭に
鳥の姿をながめ見ても
朽ちず亡びず價ある
永久の光に入りぬとは
誰か知るべきころなく
庭逍遙の目に觸れて

孔雀の鳥屋の人の世に
高き示しを興ふとは
時は滅びよ日は逝けよ
形は消えよ世は失せよ
其處に残れるものありて
限りも知らず極みなく
輝き渡る様を見む

今われ假りにそのものを
美しとのみ名け得る

振放け見れば大空の
日は午に中たり南の
高き雲間に宿りけり
織りて隙なき藤浪の

影は幾重に匂へども
紅燃ゆる天津日の
焔はあまり強くして
梭と飛び交ひ箭と亂れ
銀より白き穂を投げて
これや孔雀の尾の上に
盤渦巻きかへり送り

或は露と溢れ零ち
或は霜とおき結び
彼處に此處に戯るゝ
千々の日影のたゞずまひ
深き浅きの差異さへ
色薄尾羽にあらはれて
涌來る彩の幽かにも

末は朧に見ゆれども
盡きぬ光の泉より
ひまなく灌ぐ金の波
と見るに近き池の水
あたりは常のまゝにして
風なき晝の藤の花
静かに垂れて咲けるのみ

今夏いまなつの日の初はじめとて
菖蒲あやめ苳かり茸ふく頃ころなれば
力ちからあるかな物の榮はえ
若わかき緑みどりや樹きは繁しげり
煙けぶりは深ふかし園そのの内うち
石いしも青葉あをばや萌もえ出いでん

雫しづくこぼるゝ苔こけの上うへ
雫しづくも堅かたき思おもひあり
思おもへば遠とほき冬ふゆの日ひに
かかの美うつくしき尾おも凍こほる
寒さむき埒ねくらに起おき臥ふして
北風きたかぜ通かよふ鳥屋とやのひま
雙ふたつの翼つばさうちふるひ

もとよりこれや靈鳥の
さすがに羽は亂さねど
塵のうき世に捨てられて
形は薄く胸は痩せ
命死ぬべく思ひしが
かくばかりなるさいなみに
鳥はいよく美しく

奇しき戦や冬は負け
春たちかへり夏來り
見よ人にして桂の葉
鳥は御空の日向ひ
尾羽を擴げて立てるなり
讚に堪へたり光景の
庭の面にあらはれて

雲を驅け行く天の馬
翼の風の疾く強く
彼處蹄や觸れけんの
雨も溶き得ぬ深緑
澱未だ成らぬ新造酒の
流を見れば倒しまに
底ことくくあらはれて

天といふらし盃の
落すは淺黄瑠璃の河
地には若葉の神飾り
誰行くらしの車路ぞ
朝と夕との雙手もて
撃ぐる珠は陰光
溶けて去なんず春花に

くらべば強き夏花や
成れるや陣に驕慢の
汝孔雀よ華やかに
又かすかにも濃やかに
千々の千々なる色彩を
間なく時なく眩ゆくも
標はし示すたふとさよ

草は靡きぬ手を舉げて
木々は戦ぎぬ袖振りて
即ち物の證明なり
かへりて思ふいにしへの
人の生命の春の日に
三保の松原漁夫の
懸る見してふ天の衣

それにも似たる奇蹟かな
こひねがはくば少くも
此處も駿河とよばしめよ

斯くて孔雀は尾ををさめ
妻戀ふらしや雌をよびて
語らふごとく鳥屋の内

花耻かしく藤棚の
柱の陰に身をよせて
隠るゝ風情哀れなり
しばく藤は砂に落ち
ふむにわづらふ鳥と鳥
あな似つかしき雄の鳥の
羽にまつはる雌の孔雀

花賣はなうり

花賣はなうり娘名むすめなはお仙せん

十七花はなを賣うりりそめて

十八戀こひを知しりそめて

顔かほもほてるや耻はづかしの

蝮はびに噛かまれて脚あし切きるは

山家やまがの子こ等にらに驗げんあれど

戀こひの附ぶ子す矢やに傷きづかば

毒どくとげぬくも晚おそからん

村むらの外はつれの媼おばにきく

昔むかしも今いまも花賣はなうりに

戀せぬものはなかりけり
花の盡はす業ならん

市に艶なる花賣が
若き脈搏つ花一枝
彌生小窓にあがなひて
戀の血汐を味はん

月光日光

月光の

語ららく
わが見しは一の姫
古あをき笛吹いて
夜も深く塔の

階級まきに白々しろくと
立たちにけり

日光にっこうの

語かたるらく

わが見みしは二つぎの姫ひめ
香木かうぼくの髓香ずいかる

槽な椀げんや白乳はくじうに
浴ゆみして降りかゝる
花姿はなすがた天人てんじんの
喜よろこ悦びに地つちとよみ
虹にじたちぬ

月光げつこうの

日光の

わが見しは二の姫

顔映る圓柱

驕り鳥尾を觸れて

風起り波怒る

霞立つ空殿を

語るらく

わが見しは一の姫

一葉舟湖にうけて

霧の下まよひては

髪かたちなやましく

亂れけり

七尺せちの裾すそ曳ひいて
黄金わうこんの跡あと印つけぬ

月光げつこうの

わが見みしは一いちの姫ひめ
死しの島しまの岩いわ陰かげに
語かたるらく

青白あせしろくころび伏ふし
花はなもなくむくろのみ
冷ひえにけり

日光にっこうの

わが見みしは二ふたの姫ひめ
語かたるらく

城しろ近ちかく草くさふみて
妻つま覓まぐと來こし王み子こは
太た刀ち取とりの耻はぢ見みじと
火ひを散ちらす駿しゆん足そくに
かきかのせて直ひた走はせに
國こく領りやうを去さりし時とき
春はる風かぜは微そよ吹ふきぬ

華燭賦くわしよくのふ

律り師しは麓ふもとの
駕がは山やまの上うへ
寺てらをいいで
竹たけの林はやしの
夕ゆふの家いへの

門かどにい入りぬ

親うか戚し誰たれ彼かれ

宴えんをたすけ

小こ皿ざらの音おと

厨くりやにひゞき

燭しよくを呼よぶ聲こゑ

背せ戸とに起おこる

小こ桶おけの水みづに

浸ひたすは若わか菜な

若わか菜なを切きるに

俎まな板いた馴なれず

新あたらしき双はの

夕ゆふべは
夕ゆふべは
夕ゆふべは

清きよき時とき
樂たのしき時とき

山やまの夕ゆふべ

痕あともなければ

菱ひし形がたなせる

窓まどの外そとに

三尺じやくの雪ゆき

戸とを壓おさして

静しづかに暮くる

美しき時うつくしきとき

この夕ゆふべ

雪ありゆき

この夕ゆふべ

月ありつき

この夕ゆふべ

宴ありうたひ

火の氣弱きをひのけよろきを

憂ひてうれひて

寵にのみかまどにのみ

立つなたつな

室に入りてむろにいらて

花はなの人ひとを見みよ

花はなの人ひとと

よびまゐらせて

この夕ゆふは

名なをいはず

この夕ゆふは

名ななし

律り師し席せきに入いつて

霜しも毫ごう威いあり

長ちやう人じんを煩わづらはすに

堪たへたり夕ゆふ

琥珀こはくの酒さけ

酌くむに盃さかづきあり

盃さかづきの色いろ

紅くれなるなるを

山人やまびと驕おご奢こりに

長ちやうずと言いふか

紅くれなるは紅くれなるの

芙蓉ふようの花はなの

秋あきの風かぜに

折をれたる其その日ひ

市いちの小路こうぢの

店みせに獲えたるを

律師りし詩しに堪た能のう

箱の蓋に

紅花盃と

書して去りぬ

紅花盃を

重ねて

雪夜の宴

月出でたり

月出でたるに

島臺の下暗き

島臺の下

暗き

蓬萊の

松の上まつの上に

斜ななめにおとす

光ひかりなれば

銀ぎんの錫すず懸かけ

用意よういあらむや

山やまの竹たけより

笹ささを摘つみて

陶瓶たうびんの口くちに

挿させしのみ

王者わうじゃの調度てうどに

似にぬは何なに々々

其子そのこの帯おびは

うす紫むらさきの
友禪ゆうぜん染ぞめの
唐縮緬とうちりめんか

艶つやある髪かみを

結むすぶ時ときは

風かぜよく形かたちに

逆さからひ吹ふくと
怨うらみずる恨うらみ
今いま無なし

若わかき木樵きせうの

眉まゆを見みれば

燭しよくを剪きる時とき

陰かげをうけて

額ぬか白しろき人ひと

室むろにあり

袴はつのうへに

手てをうちかさね

困こずる席せきは

花はなのむしろ

筵むしろの色いろを

評ひやうするには

まだ唇くちびるの

紅べにぞ深ふかき

北きたの家いへより

南みなみの家いえに

來くる道みちすから

得えたる思おもひは

花はなにあらず

蜜みつにあらず

花はなよりも

蜜みつよりも

美うつくしく甘あまき

思おもひは胸むねに溢あふれたり

雷いかづち落ちて

簀やぶを燒やきし時とき

諸もろ手に腕かひなを

今相對

許せし人は

ひて

月を挟む

盃とるを

羞る二人は

天の上

若き星の

酒の泉の

前に臨みて

香へる浪に

恐づる風情

紅花盃

琥珀こほろの酒さけ

白しろき手てより

荒あらき手てにうけて

百ひやくの矢やうくるも

去さるな二人ふたり

御み寺てらの塔たふの

扉とびらに彫ほれる

神しん女にょの戲たはぶね

笙しやうを吹ふいて

舞まふにまされる

雪せつ夜やのうたげ

律り師し駕がに命いのちじて

北の家に行き

月下の氷人

去りて後

二人いさゝか

容儀を解きぬ

夜を賞するに

律師の詩あり

詩は月中に

桂樹挂り

千丈枝に

銀を着く

銀光溢れて

家に入らば

トする所

幸なりと

五月野

五月野の晝しみら

瑠璃囀の鳥なきて

草長き南國

極熱の日に火ゆる

謎と組む曲路
深沼の岸に盡き
人形の樹立見る
石の間青き水

水を截る圓肩に
睡蓮花を分け

のぼりくる美し君
柔かに眼を開けて

玉藻髪捌け落ち
眞素膚に翻へる浪
木々の道木々に倚り
多の草多にふむ

葉の裏に虹懸り
 姫の路金撲つ
 大地の人離野
 變化居る白日時

垂鈴の百濟物

熟れ撓む石の上
 みだれ伏す姫の髪
 高圓の日に乾く

手枕の腕つき
 白玉の夢を展べ
 處女子の胸肉は

力ある足の弓

五月野の濡跡道

深沼の小黒水

落星のかくれ所と

傳へきく人の子等

空像の數知らず

うかびくる岸の隈

湧き上ぼる高水に

いま起る物の音

めざめたる姫の面

丹穂なす火にもえて

たわわ髪身を起す
光宮玉の人

微笑みて下り行く

湖の底姫の國

足うらふむ水の梯

物の音遠ざかる

目路のはて岸木立
晝下ちず日の眞洞
迷野の道の奥
水姫を誰知らむ

花柑子

島國の花柑子

高圓に匂ふ夜や

大渦の荒潮も

羽をさめほゝゑめり

病める子よ和の今

窓に倚り常花の

星村にぬかあてゝ

さめぐとなけよかし

生をとめ月姫は

新なる丹の皿に

開命貴寶を盛り
よろこびの子にたびん

清らなる身とかはり
五月野の遠を行く
花環虹めぐり
銀の雨そくぐ

不開の間

花吹雪
まぎれに
さそはれて
いでたまふ
館の姫

夢ゆめ
の
華はな

香かぐの物もの
焚たきさし
採ひ火と女りめく
影かげ動うごき
きえにけり

蝕むしばめる
古ふる梯はし
眼めの前まえに
櫓やぐらだつ
不あ開ひらの
間ま

處女をとめの

胸むねにさき

きざはしを

のぼるか

諸扉もろとびら

さと開あく

風かぜのごと

くらやみに

誰たぞあるや

色いろ蒼あはく

まみあけ

衣冠いこんして

束帯そくたいの
人立ひとたててり

思おもふ今いま

いけにへ

百年ちとせを

人柱ひとばしら

えも朽くちず

年とし若わかき

つはもの

戀こひ人ひとを

持もち乍なら

うめられぬ

禁制いまいしめ 姫ひめの裾すそ
なほ見みえぬ
扉とびらとつ
白壁しろかべに
居をる蟲むし

怪けし瞳ひとみ
炎ほのほに
身みは燃もえて
死しにながら
輝かがやける
何なにしらん

春はるの日は
うつろなす
暮くれにけり

安あ乗のりの稚ち兒ご

志し摩まの果はて安あ乗のりの小こ村むら
早はや手て風かぜ岩いはをどよもし
柳やなぎ道みち木き々々を根ねこじて
虚み空そら飛とぶ断ちぎれの細ほそ葉は

水底の泥を逆上げ
 かきにごす海の病
 そり立つ波の大鋸
 過げとこそ船をまつらめ
 とある家に飯蒸かへり
 男もあらず女も出で行きて

稚子ひとり小籠に座り
 ほゝるみて海に對へり

荒壁の小家一村
 反響する心と心
 稚子ひとり恐怖をしらず
 ほゝるみて海に對へり

いみじくも貴き景色
今もなほ胸にぞ跳る
少くして人と行きたる
志摩のはて安乗の小村

鬼の語

顔蒼白き若者に
秘める不思議きかばやと
村人数多來れども
彼はさびしく笑ふのみ

前まへのひ日むら村を立たち出いで、
仙せん者じやがな嶽たけにのぼりしが
恐おそ怖れをいだ抱くもの、こと
山やまのけし景しき色を語かたらはず

傳つたへき聞くらく此この河かはの
きはまる所ところ瀧たきありて

其それより奥おくにいるものは
必かならずま山やまのた崇たけあり

蝦が蟻ま氣きをふ吹いて立たち曇くもる
篠しの竹たけ原はらをわ分け行ゆけば
冷ひえし掌てのひらあらはれて
頂うなじにかほ顔に觸ふる、とぞ

陽炎高さ二萬尺

黄山赤山黒山の

劍を植ゑたる頂に

秘密の主は宿るなり

盆の一日は暮れはて

淋しき雨と成りにけり

怪しく光りし若者の
眼の色は冴え行きぬ

劉邦未だ若うして

谷路の底に蛇を斬りつ

而うして彼れ漢王の

位をつひに贏ち獲たり

この子も非凡山の氣に
中たりて床に隠れども
禁を守りて愚鈍者に
鬼の語を語らはず

戯れに

わが居る家の大地に
黒き帝の住みたまひ
地震の踊の優なれば
下り來れと勅あれど
われは行きえず人なれば

わが居る家の大空に
白き女王の住みたまひ
星の祭の艶なれば
上り来れと勅あれど
われは行きえず人なれば

わが居る家の古厨子に
遠き御祖の住みたまひ
とこ降る花のたへなれば
開けて来れとのたまへど
われは行きえず人なれば
わが居る家の厨内

働く妻をよびとめて
夕の設をたづぬるに
好める魚のありければ
われは行きけり人なれば

初陣

父よ其手綱を放せ
槍の穂に夕日宿れり
數ふればいま秋九月
赤帝の力衰へ
天高く雲野に似たり

初陣の駒鞭うたば
夢杳か兜の星も
さらめきて東道せむ

父よ其手綱を放せ
狐啼く森の彼方に
月細くかゝれる時に

一すじの烽火あがらば

勝軍笛ふきならせ

軍神わが肩のうへ

銀燭の輝く下に

盃を洗ひて待ちね

父よ其手綱を放せ

髪かみ 皤しろ くきみ老ま いませり
花はな 若わか く我わが 胸むね 踴おど る
橋はし を断た ちて砲ぱう おしならべ
巖いは 高たか く劍つるぎ を植う ゑて
さか落おと し千丈ちぢやう の崖がけ
旗はた さし物もの 亂みだ れて入い らば
大雷たいらい 雨う 奈落ならく の底そこ

風寒かぜ しあ、皆血みなち 汐しほ

父ちち よ其手綱そのたづな を放はな せ
君きみ ちばしうた、寢ね のまに
繪卷物ゑまきもの 逆さか ぎやくに開ひら きて
夕ゆふ べ星波間ほしなみ に沈しづ み
霧きり 深ふか く河かは の瀬せ なりて

野の草に亂るゝ螢
石の上悪氣上りて
亡跡を君にあらせん

父よ其手綱を放せ
故郷の寺の御庭に
うるはしく列ぶおくつき

栗の木こそよげる夜半に
たゞ一人さまよひ入りて
母上よ晩くなりぬと
わが額をみ胸にあてゝ
ひたなきになきあかしなば
わが望満ち足らひなん
神の手に抱かれずとも

父よ其手綱を放せ
雲うすく秋風吹きて
萩芒高なみ動き
軍人小松のかげに
遠祖らの功名をゆめむ
今ぞ時貝が音ひゞく

初陣の駒むちうちて
西の方廣野を驅らん

駿馬問答

使者

月毛なり連錢なり

丈三寸年五歳

天上二十八宿の連錢

須彌三十二相の月毛

青龍の前脚

白虎の後脚

忠を踏むか義を踏むか

諸蹄の薄墨色

落花の雪か飛雪の花か

生つきの眞白栲

竹を剥ぎて天を指す兩の耳のそよぎ
鈴を懸けて地に向ふ雙の目のうるほひ
舉れる筋怒れる肉
銀河を倒にして膝に及ぶ鬣
白雲を束ねて草を曳く尾
龍蹄の形驕驕の相
神馬か天馬か

言語道斷希代なり
城主の御親書
献上違背候ふまじ

駿馬の主

曲事仰せ候

城主の執心物に相應はず
夫れ駿馬の來るは
聖代第一の嘉瑞なり
虞舜の世に鳳凰下り
孔子の時に麒麟出るに同じ
理世安民の治略至らず
富國殖産の要術なくして

名馬の所望及び候はず

使者

御馬の具は何々
水干鞍の金覆輪
梅と櫻の螺鈿は

御庭の春の景色なり

鞆の縫物は

飛鳥の孔雀七寶の縁飾

雲龍の大履脊

紗の鞍褙

さて蘇芳染の手綱とは

人車記の故實に出で

鐵地の燈は

一葉の船を形容たり

鞆鞆は

大總小總掛け交ぜて

五色の絲の縷絲に

漣組たる連着懸

差繩行繩引繩の

縁みどろに映はゆる唐錦からにしき
菱形ひしがた轡蹄くわひづめの鐵かね
馬うま装束そうぞくの數々かずかずを
盡つくして召めされうづるにても
御錠ごじやう違背いはい候さふらふか

駿馬しゆんまの主ぬし

中々なかの事ことに候さふらふ
駿馬しゆんまの威徳ゐとくは金銀こんぎんを忌みい候さふらふ

使し者しや

さらば駿馬しゆんまの威徳ゐとく

御物語候へ

駿馬の主

夫れ駿馬の威徳といつば
世の常の口強足駿
笠懸流鏑馬犬追物

遊戯狂言の凡畜にあらず
天竺震旦古例あり
馬は觀音の部衆
雜阿含經にも四種の馬を説かれ
六波羅密の功德にて
畜類ながらも菩薩の行
悉陀太子金色の龍蹄に

十丈の鐵門を越え
三界の獨尊と仰がれ給ふ
帝堯の白馬
穆王の八駿
明天子の徳至れり
漢の光武は一日に
千里の馬を得

寧王朝夕馬を畫て
桃花馬を逸せり
異國の譚は多かれども
類稀なる我宿の
一の駿馬の形相は
嘶く聲落日を
中天に回らし

蹄ひづめの音おと星辰せいしんの
夜よる碎くだくる響ひびきあり
躍おどれば長ちやう髪はつ風かぜに鳴なうて
萬ばん丈ぢやうの谷たにを越こえ
馳はすれば鐵てつ脚きゃく火ひを發はつして
千せん里りの道みちに疲つかれず
千せん斤けんの鎧よろひ百ひゃく貫くわんの鞍くら

堅かた轡ぐわつよ強ぢやう鞭むち
鎧よろひかろく
鞍くらゆるく
轡ぐわつよは噛かみ碎くだかれ
鞭むちはうちをれ
飽あくまで肉しの硬かたき上うへに
身み輕がるの曲まが馬ば品しな々々の藝わざ

碁盤立弓杖

一文字杭渡り

教へずして自ら法を得たり

扱又絶險難所渡海登山

陸を行けば平地を歩むが如く

海に入れば扁舟に棹さすに似たり

木曾の御嶽駒ヶ嶽

越の白山立山

上宮太子天馬に騎して

梵天宮に至り給ひし富士の峯

高き峯々嶽々

阿波の鳴門穩戸の瀬戸

天龍刀根湖水の渡り

聞ゆる急流荒波も

蹄ひづめにかけてかつしく
肝かん臆おそずかげは早はやし
いつかな馳かけり越えつべし
そのほか戦せん場ぢやうの砌は
風かぜの音に伏勢ふせを覺り
雲くもを見て雨雪うせつをわきまふ
先せん陣ぢん先さき駈がけ拔ひ駈が間ま牒び

又または合戦せん最も中なかの時
槍やり矛ぼこ箭や種たねヶ島
面めんをふり躰をかはして
主しゆをかばふ忠ちゆうと勇は
家いへ子のこ郎らう等どうに異ならず
かゝる名馬めいばは奥の牧
吾あつ妻まの牧犬まい山さん木き曾そ

甲斐の黒駒
その外諸國の牧々に
萬頭の馬は候ふとも
又出づべくも候はず
名馬の鑑駿馬の威徳
あゝら有難の我身や候

使者

御物語奇特に候
とうく城に立歸り
再度の御親書
申し請はゞやと存じ候

駿馬の主

かしまじき御使者候
及びもなき御所望候へば
いか程の手立を盡され
いくばくの御書を遊ばされ候ふとも
御料には召されまじ

法螺鉦陣太鼓
旗さし物笠符
軍兵數多催されて
家のめぐり十重二十重
関の聲あげてかこみ候ふとも
召料には出さじ
器量ある大將軍にあひ奉らば

其時こそ駒も榮あれ駒主も
道々引くや四季繩の
春は御空の雲雀毛
夏は垣ほの卯花鶉毛
秋は落葉の栗毛
冬は折れ伏す蘆毛積る雪毛
數多き御馬のうちにも

言上いたして召され候はん
拜謁申して駿馬を奉らん

この篇『飾馬考』『驛縮全書』『武器考證』『馬術全書』『鞍證
之辯』『春日神馬繪圖及解』『太平記』及び巢林子の諸作
に憑る所多し敢て出所を明にす

を
は
り

日を受けし旗雲の彼方、鐵漿壁せしは、篠、日間賀、佐久の島
 島、師崎はかすけく、立馬脚はほのかに、神風を吹く勢の國は、
 淡路一抔、遠く大わだつみの外に立ち籠めたり。江比間とやら
 む、路、丘腹に通ず、下は海、碧瀬層を追ひて群松の根を洗ふ、
 松瀬濤聲、心意甚だ寧らかなり。すてにして丘阜の間に入り、
 時してまた海邊に出づ、一匣の碧色、波風をて水に音なし、白砂
 前に奔り亂松後に繞る。沖に鷗がける帆の、三つ四つ二つ、一
 段の興趣を添ふ。(『影』 照潮記、伊良湖の一節)



世評

●二六新報

細川花紅氏千金の家に生れて文を能し兼
 て寫眞の技に巧なり。「影」は其文章と撮
 影とを集めたるもの。常盤嶽影行と中禪
 寺の三日は常盤紀行文と運を異にし、談

●萬朝報

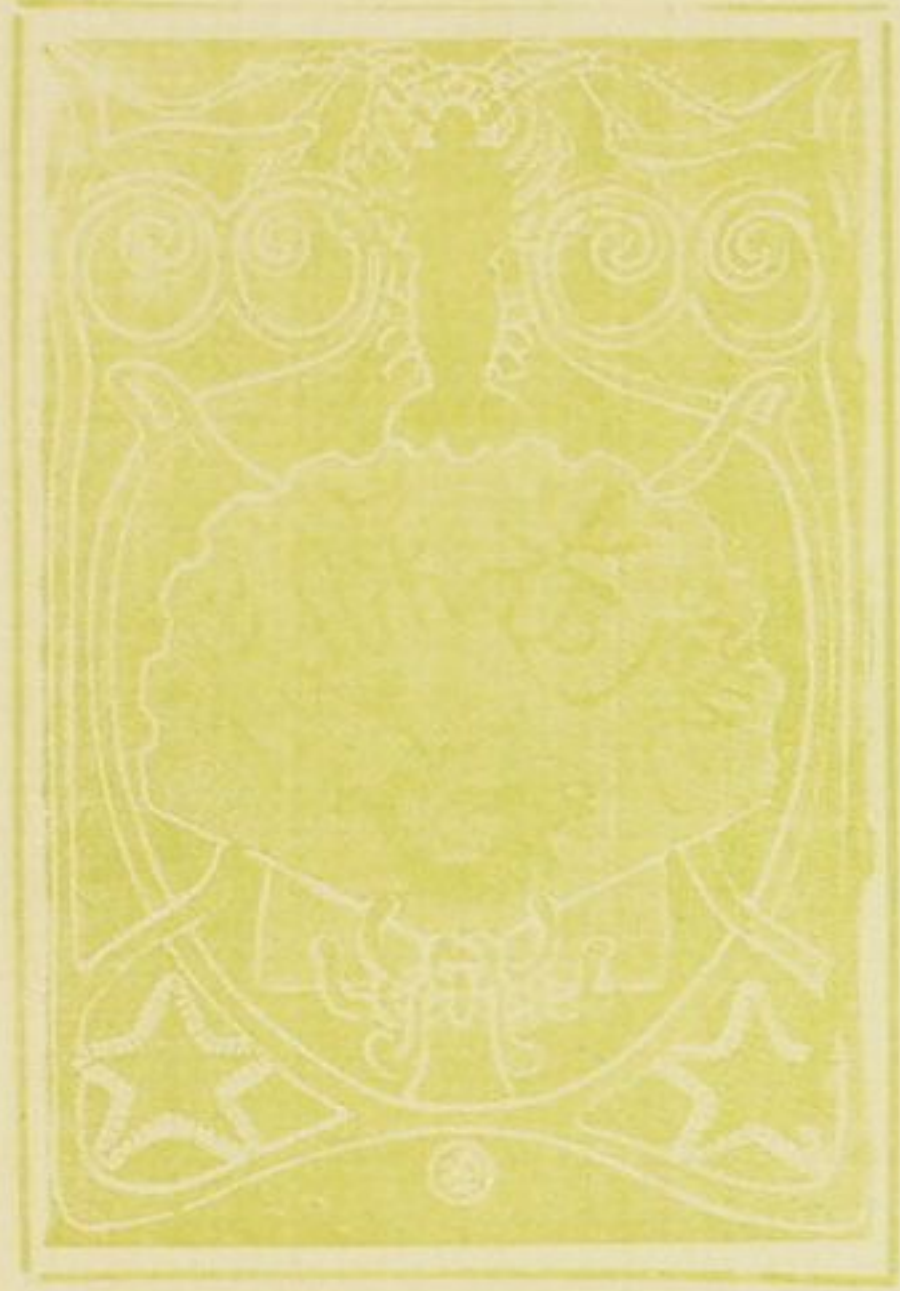
細川花紅といふ寫眞好文學好の銀座で
 有名な紙屋の若旦那の道樂に拵へた紀行
 集、巻尾に山岸荷葉の短篇小説を挿
 入す。その装釘紙質の見事なる、紅葉山人

を
は
り

●細川花紅逸人誕生第二十三週年紀念著●

小品

紀行



流水墅書院發行

茂志保艸

錢八金費送郵

特製金壹圓五拾錢
上製金六拾八錢

表紙繪 中澤弘光君

水族 (綾羽二重木版極彩色五遍刷)

見返し畫 中澤弘光君

海底 (奉書木版彩色三度刷)

口繪 梶田半古君

潮浴 (奉書木版精巧十七遍刷)

挿畫 中澤弘光君

白菊の精 (奉書木版極彩色十五遍刷)

良夜 (鳥の子紙木版色刷)

落英 (鳥の子紙木版色刷)

熱烈 (鳥の子紙木版色刷)

京を去る文
白菊を懐かしむ辭

紫陽花の月
浄地の月

野人
多摩川を阻ふ記

落行
續せせらぎ日記

盆玩
具

自然
景

熱自
然

錢 貳 拾 八 錢

●細川花紅逸人誕生第二十三週年紀念著●

流水墅書院發行

小品

紀行



茂志保艸

特製金壹圓五拾錢
上製金六拾八錢

錢入金費送郵

次 目

表紙繪 中澤弘光君
 水 族 (綾羽二重木版極彩色五遍刷)
 見返し畫 中澤弘光君
 海 底 (奉書木版極彩色三度刷)
 口 繪 梶田半古君
 潮 浴 (奉書木版精巧十七遍刷)
 插 畫 中澤弘光君
 白菊の精 (奉書木版極彩色十五遍刷)
 夏 夜 (鳥の子紙木版色刷)
 落 英 (鳥の子紙木版色刷)
 熱 烈 (鳥の子紙木版色刷)

京を去る文
 旅 白菊を懐かしむ辭
 野 淨地の
 多摩川を咀ふ記
 續せせらぎ日記
 落花
 行 玩盆
 熱自益
 遊 結 姉 紀
 花月人 視 辭 文 記 記 日 記 花 春 具 景 然 烈 鮮 行

附 錄 島崎藤村君 椰子の葉蔭

夕陽は沈みぬ、新月の影、圓盤の空にまやけく、富士はますます、
 照りわたりにて、紫水晶の燦として夜目にもひかり輝くがごとし。
 蕭々たるもふ、われは富士の寵兒にあらずやと。あゝ、倨傲の
 「人」、酷薄の「世」、壓抑や、陷穢や、戕虐や、日夜心神を憫ま
 して、この飄客の羸軀を責め、埋骨の地いま將たわがために寸
 土を割らずして、愁風徒らに萬恨を寄せぬるさのふけふ、憐れ
 るものは寧められ、苦めるものは慰められたり。恵みある靈山
 や、こゝに詩神の榮を得たるわれは幸あるかな。
 Mountain is the throne of Truth!
 富士を讀して何とばなく袖を濡し候。(『茂志保艸』京を去る文
 の一節)



世 評

●都新聞

○此の文章はや、情趣を缺く所あるが如き
 ○も、その研靡の筆致は優に一家をなすべ
 ○く、最終の紀行文(送姉紀行)の如き濃
 ○艶を極めたり

○疊に(影)つぶ聲を世に公にして、出版
 ○界に美的釘裝の標本を示したる細川花紅
 ○氏は、いま其の第二十三回の誕辰を紀念
 ○する爲に、自己の作品數篇を蒐めたる、
 ○(『茂志保艸』)を其の知友に頒ち贈れり。絹
 ○表紙には精好の極彩色模様を現はし、挿
 ○畫の木彫彩色版、表紙の裏の見返し、紙
 ○質の精良なる、印刷の鮮明なる、綴りに用
 ○ひし革紐など、何れも凝りに凝りしもの
 ○なり、本年の出版物に是れほどの美本は
 ○曾て見ず、收むるごころの小品、文字清
 ○新、筆を落して爽氣紙に満てり。

●國民新聞
 ●内容は必しも其數多からざれど精選せ
 ●り。巻頭の(京を去る文)を讀んで、眉山
 ●の(ふらふら日記)を思出せり。次では(白
 ●菊を懐かしむ辭)旅観等、何れも是れ著
 ●者の華の如き文才を示さるるものがある

●文藝俱樂部
 ●に凝りに凝つた美本も澤山に見たが、

目次

口繪	梶田半古君	多摩川を咀ふ記
潮浴	(奉書木版精巧十七通刷)	野
挿畫	中澤弘光君	續せせらぎ日記
白菊の精	(奉書木版極彩色十五通刷)	
真夜	(鳥の子紙木版色刷)	
落英	(鳥の子紙木版色刷)	
熱烈	(鳥の子紙木版色刷)	
附錄	島崎藤村君	遊結
小品	椰子の葉蔭	梯紀
		熱自益玩行落
		行鮮烈然景具春花

夕陽は沈みぬ、新月の影、圓盤の空にそよげく、富士はますます照りわたりにて、紫水晶の燦として夜目にもひかり輝くがごとし。肅めてたもふ、われは富士の寵兒にあらずやと。あゝ、倨傲の「人」、酷薄の「世」、壓抑や、陷擠や、戕虐や、日夜心神を憐まして、この飄客の羸軀を責め、埋骨の地いま將たわがために寸土を割らずして、愁風徒らに萬恨を寄せぬるさのふけふ、惱めるものは寧められ、苦めるものは慰められたり。惠みある靈山や、こゝに詩神の榮を得たるわれは幸あるかな。
 Mountain is the throne of Truth!
 富士を讀して何とばなく袖を濡し候。「茂志保紳」京を去る文の一節)



世評

●国民新聞

内容は必しも其數多からざれど精選せり。巻頭の「京を去る文」を讀んで、眉山の(ふまこころ日記)を思出せり。次では(白菊を讀りしむ詩) 旅観等、何れも是れ著者の華の如き文才を示さるものがあるべし。實に華々しくして宛も花園に入りたるが如し。況んや其製本の美且つ意匠に富む、用紙の良に加ふるに印刷の良あり、更らに挿畫の精巧を以てして、我が歌文學界には容易に見得べからざる體裁を有す。

●大阪毎日新聞

氏の如き資産家が自らその資を出して、出版界に貢獻する所あるは喜ぶべし、

發兌元

東京橋區
銀座三丁目

左久良書房

電話新橋 三百四十番

●都新聞

疊に「影」へうぶ聲を世に公にして、出版界に美的釘裝の標本を示したる細川花紅氏は、いま其の第二十三回の誕辰を紀念する爲に、自己の作品數篇を蒐めたる、「茂志保紳」を其の知友に頒ち贈れり。絹表紙には精好の極彩色模様が現はし、挿畫の木影彩色版、表紙の裏の見返し、紙質の精良なる、印刷の鮮明なる、綴りに用ひし革紐など、何れも凝りに凝りしものなり、本年の出版物に是れほどの美本は曾て見ず、收むるごころの小品、文字清新、筆を落して爽氣紙に満てり。

●文藝俱樂部

世に凝りに凝つた美本も澤山に見たが、此の「茂志保紳」の如きは、未だ余の手に爲た事はないと言つても可い程で、先づ羽二重の表紙に一驚を喫し、梶田半古君及び中澤弘光君が其の才筆を揮つた挿畫の印刷、用紙の美々しさに二驚を喫し、其の本文を繕くに及んで、著者が文致の精練なるに、余は實に三驚を喫したのであつた。

題字 尾崎紅葉君
 表紙 鏑木清方君
 寫眞 日本寫友會員
 (寫眞)文學記者 細川花紅逸人著
 序文 巖谷小波君
 口繪 鳥居清忠君
 附録 山岸荷葉君



日本寫友會發行
 郵送費金八錢
 製本費金九拾八錢

次 目

寫眞俳畫 (コロタイプ)	寫眞風景畫 (アワトタイプ)	寫眞意匠畫 (コロタイプ)	見返し畫 (舶來紙石版三度刷)	表紙繪 (金クローズ金版刷)
銀山秋巨入 河雨水人 雨句長	心花春月日 ののののの	星 の	松原の影	青葉陸
行	船嘯空來下	影	影	影
採中禪寺の三日	雪紀空面	常磐撮影	夕がほ前日	照潮記
附録 小鳥	の	うつしる日記	伊長	伊長
影	影	影	影	影

空よく霽れたり、上は小松の褐色染、下は青海波の襷摺縹、鏡とまがふ渥美の入江に、うつりもやせむ紫の、紫立てるは三の山か、雪の流るゝは尾の峰か、日曜脚の靴、脚けて涙ふと見ても日を享けし旗雲の彼方、鐵漿壁せしは、篠、日間賀、佐久の島、師崎はすけく、立馬岬はほのかに、神風ぞ吹く勢の國は、淡霧一抹、遠く大わたつみの外に立ち籠めたり。江比間とやらむ、路、丘腹に通ず、下は海、碧瀾層を追ひて群松の根を洗ふ、松嶺清聲、心意甚だ寧らかななり。すまに於て丘阜の間に入り、雲時してまた海邊に出づ、一匣の碧色、波風きて水に音なし、白砂前に奔り亂松後に繞る。沖に鳴かかける帆の、三つ四つ二つ、一段の興趣を添ふ。(『影』照潮記、伊長湖の一節)



世 評

●二六新報

細川花紅氏千金の家に生れて文を能し兼て寫眞の技に巧なり。「影」は其文章と撮

●萬朝報

細川花紅といふ寫眞好文學好の銀座で有名な紙屋の若旦那の道樂に拵へた紀行集、巻尾に山岸荷葉の短篇小説を挿さ

は地質地文に及びて觀察清新、照潮記、夕がほ日記、うつし日記、文姿清健皆絶品たるを失はず。附録山岸荷葉氏の鳥影は清麗無雙なり。殊に寫眞版の精巧なる、表装金色の華麗なる、さては意匠の新しき、紙頁の美しくしき、現時出版界容易に見る能はざるの逸品、花紅氏が文藝に貢獻の勞多とせざるを得ず。

クロス金箔摺へ影の一字に櫻の若葉蔭を摺り込み、表裏の見返し三頁は清方の海邊の松が海上に倒影する三度摺の彩色畫、口繪は清忠の關兵衛、奉書刷のそれほく見事なるもの星の影を利かせ、挿める寫眞に日、月、春、花、心の玉影さゆく春の一葉は印章として驚くべき値をもつて居る、その外にも景色畫が數葉あつて、本文の紀行文と共に、若旦那氣質を絶した執事も見事なるものである。

發兌元 東京京橋區銀座三丁目 左久良書房

電話新橋 三百四十番

序文 後藤宙外君

口畫 山中古洞君



評語 東京時報兩君

●大阪朝日新聞
花紅子畫に「影」といふ冊子を物して、美麗なる寫眞、清洒なる文章をうつし今又「うぶ聲」をあらはす。影と聲と、以て花紅子を捕ふべし。是れ渠の二十二回

細川花紅氏の著にして、カナリヤの戀、樂の力、車丁、深山の湖水、磯馴衣等を集めて一篇とし、以て氏が誕辰の紀念として出版せるものたり。氏の文風に一家の調を爲し、又同情の深厚なる點、特に喜ぶべし。釘装は例に依つて申分なく、挿畫表紙畫等又遺憾なし。

東京市京橋區銀座三丁目 左久良書房
(電話新橋三百四十番)
東京市神田區表神保町 東京堂書店
(電話本局二百四十八番)

は地質地文に及びて觀察清新、照湖記、夕がほ日記、うつし日記、文姿清健皆絶品たるを失はず。附録山岸荷葉氏の鳥影は清艶無雙なり。殊に寫眞版の精巧なる、表装金色の崇麗なる、さては意匠の新しき、紙質の美しくしき、現時出版界容易に見る能はざるの逸品、花紅氏が文藝に貢献の勞多とせざるを得ず。

クロース命箱摺へ影の一字に櫻の若葉陸を摺り込み、表裏の見返し三頁は清方の海邊の松が海上に倒影する三度摺の彩色畫、口繪は清忠の關兵衛、奉書刷のそれは、見事なもので星の影を利かせ、挿める寫眞に日、月、春、花、心の五彩とゆく春の一葉は印畫として驚くべき値をもつて居る、その外にも景色畫が数葉あつて、本文の紀行文と共に、若旦那氣質を絶した孰れも見事なものである。

發兌元 東京橋區 左久良書房

銀座三丁目

電話新橋 三百四十番

序文 後藤宙外君 口畫 山中古洞君
 挿繪 一條成美君 附録 中村春雨君
 ● 細川花紅逸人誕生第二十二週年紀念著 ●



うぶ聲

製本費金參拾九錢

郵送費金四錢

大日本竹馬會發行

次 目

表紙畫 藁の上 (アイボリ紙木版五遍刷)
 口繪 鳳雛兒 (奉書木版十五遍刷)
 挿繪 うぶ聲、眞綿、フランボー、宮參、鳥の子(ケント紙木版各色刷)
 せせらぎ日記 カナリヤの戀、樂の力、車丁 深山の湖水、磯馴衣
 門出、白蓮紅蓮、船路、城が島、追懷、靈祭、落日、良夜、牽牛花、白旗紅旗
 ● 附録 小誕生日 說

されど、それは瞬間の迷想のみ、慰藉なくして雲時も安居し難きわれ、まづも慰藉を到所に求めて到所に得ざるわれの、いかにして彼のごとく平和を得べきか。轆轤の半世、淪落の微軀、骨をこの山に曝さむとするに、妄念なほ火よりも熾なり、水のながれ、雲のたえずまひ、白露隕つる夕や、細雨粘する朝や、そこに惱みなきか、そこに煩ひなきか、秋閑けて萬山黄なるとき、冬深うして四境白きとき、そこに苦みなきか、そこに痛みなきか、飛花しつ心なく散り、落葉亂れて舞へるのをり、われはなほこゝに安意の

序文 後藤宙外君
 挿繪 一條成美君
 口畫 山中古洞君
 附錄 中村春雨君
 ●細川花紅逸人誕生第二十二週年紀念著●

小品

紀行



大日本竹馬會發行

うぶ聲

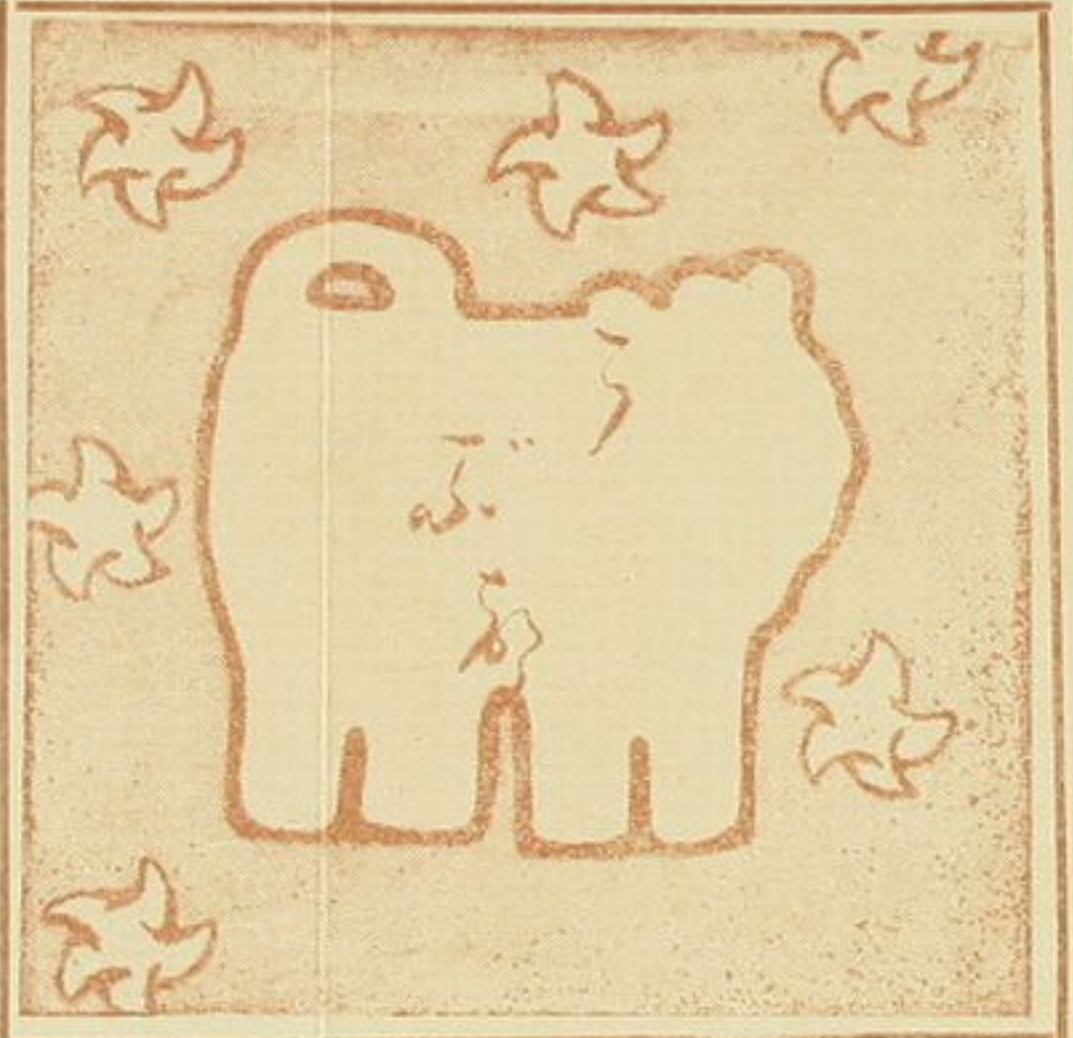
郵送費金四錢

製本費金參拾九錢

次 目

- 表紙畫 藁の上 (アイボリ紙木版五遍刷)
- 口 繪 鳳雛兒 (奉書木版十五遍刷)
- 挿 畫 うぶ聲、眞綿、フランボ、宮參、鳥の子(ケント紙木版各色刷)
- せせらぎ日記 カナリヤの戀、樂の力、車丁、深山の湖水、磯馴衣
- 門出、白蓮紅蓮、船路、城が島、追懷、靈祭、落日、良夜、牽牛花、白旗紅旗
- 附錄 小誕生日 說

されど、それは瞬間の迷想のみ、慰藉なくして霎時も安居し難きわれ、まかも慰藉を到所に求めて到所に得ざるわれの、いかにして彼のごとく平和を得べきか。轆轤の半世、淪落の微軀、骨をこの山に曝さむとするに、妄念なほ火よりも熾なり、水のながれ、雲のたえずまひ、白露隕つる夕や、細雨粘する朝や、そこに惱みなきか、そこに煩ひなきか、秋閑けて萬山黄なるとき、冬深うして四境白きとき、そこに苦みなきか、そこに痛みなきか、飛花しづ心なく散り、落葉亂れて舞へるのをり、われはなほこゝに安意の地を得べきか。いなと心のうちに叫びしわれは、堪へ難き悶えを感じぬ。(「うぶ聲」深山の湖水の一節)



世 評

誕辰の紀念なりとか。その得意察するに足る。渠は千金の家に生れ、而も同情及び趣味に富めり。樂むと共に能く泣く、泣くだけそれだけ樂しきならん。ハイカラの「影」に照らして、ハイカラの「うぶ聲」を聴けば首肯かるべし。

●東京日日新聞

細川花紅氏の著にして、カナリヤの戀、樂の力、車丁、深山の湖水、磯馴衣等を集めて一篇とし、以て氏が誕辰の紀念として出版せるものなり。氏の文風に一家の調を爲し、又同情の深厚なる點、特に喜ぶべし。釘装は例に依つて申分なく、挿畫表紙畫等又遺憾なし。

●大阪朝日新聞

花紅子眞に「影」といふ冊子を物して、美麗なる寫眞、清洒なる文章をうつし今又「うぶ聲」をあらはす。影と聲と、以て花紅子を捕ふべし。是れ渠の二十二回

東京市京橋區銀座三丁目

左久良書房

(電話新橋三百四十番)

東京市神田區表神保町

東京堂書店

(電話本局二百四十八番)

書圖刊新房書良久左

國木田獨歩君著
小杉未醒君畫
滿谷國四郎君畫

小説
運命

製本費金七拾五錢 郵送費金六錢

●要目 ●運命論者 ●巡查 ●酒中
日記 ●馬上の友 ●悪魔 ●畫の悲
み ●空知川の岸邊 ●非凡なる凡
人 ●日の出

『獨歩集』以外の傑作を網羅せり

馬場孤蝶君選
齋藤松洲君畫

詩集
春駒

製本費金參拾五錢 郵送費金四錢

現に睡る野を焼けば、胸の春駒戀を得て、わかき
血汐に狂ふこと、燃えて驕れるかげろふや。白き鹿
ふりみだし、西に勢へる駿足の、みるみる丘をのぼ
りては、凱歌あぐる焔かな。あらおもしろなのながめ
よと、はらばひて吹く牧の子が、すさびの笛は草な
れば、おのづからなる野の調。ほのほは高く天に和
ぎ、笛の音清く地に流れ、情想融くなる春風の、ま
た夢に入る紫野。

●は地質地文に及びて觀察清新、照潮記、
夕がほ日記、うつし日記、文姿清健皆

クロース金箔摺へ影の一字に櫻の若葉蔭
を摺り込み、表裏の見返し三頁は清方の

書圖刊新房書良久左

明治三十九年度

太平洋會 畫カタログ

製本費金壹圓 郵送費金四錢

明治三十九年度

繪葉書 太平洋會 參考堂

六枚壹組金貳拾錢 郵送費金貳錢

明治卅九年 春季太平洋 繪畫會展覽會 紀念繪葉書

六枚壹組金貳拾錢 郵送費金貳錢

寫眞文學記者 沙上寫隱新著

寫眞 小詩材 小影

製本費金貳拾八錢 郵送費金四錢

畫帖につゝむ初戀を、君よ咎むな胸に咲き、胸に散りにし小さき花、その懐かしみ誰か知る。夜、手枕のひとり寐に、有情の夢のかたらひや、曉、覺めてながめ入る、影は無心の笑まひかな。指僕ふる二十年の、名残の色は艶なりき、今は昔の匂ひさへ、黄脂日にますうらぶれや。さはれほのめくなまめきの、眼ざしに盡きの生命あれ、巻の寫繪がずがずを、瓦とすて、玉と止めむ。

書圖刊既房書良久左

齋藤 弔花 君 小品文集 心扉錄 (再版)

製本費 金參拾五錢 郵送費 金四錢

馬場孤蝶君選著 詩集 花がたみ (三版)

製本費 金參拾四錢 郵送費 金四錢

書圖刊近房書良久左

岡鬼太郎君著 說小書 夜帶 製本費 金四拾八錢 郵送費 金四錢	戶川秋骨君著 譯文西詞餘情 製本費 未 郵送費 未	岩野泡鳴君著 論神秘的半獸主義 製本費 未 郵送費 未	河井醉茗君選 詩集桂の卷 製本費 未 郵送費 未	小杉未醒君著 畫集漫畫一年 製本費 未 郵送費 未
定	定	定	定	定

製本費 金十七錢
郵送費 金六錢

明治三十三年五月一日印刷
明治三十三年五月五日發行

編輯者 東京府荏原郡品川町利田新地六番地 戶田直秀

發行所 東京市京橋區銀座三丁目 左久良書房
(電話新橋三四〇番)

印刷所 東京市京橋區築地三丁目十五番地 帝國印刷株式會社
印刷者 東京市京橋區南小田原二丁目九番地 中野鐵太郎



特約大取次所

(次第不同いろは順)

東京市日本橋區東區町
 東京市京橋區尾張町三丁目
 東京市神田區表神保町
 東京市京橋區龜屋町
 東京市神田區靈神保町
 東京市京橋區中橋廣小路
 東京市日本橋區大傳馬町三丁目
 東京市神田區表神保町
 東京市日本橋區住吉町
 大阪市東區備後町四丁目
 大阪市東區博勞町四丁目
 名古屋市本町三丁目
 熊本市新三丁目

北東東長上前淺修至寶中川長
 隆海京明田文文文誠文
 館堂堂堂閣屋堂堂堂
 榮林

店店店館堂堂堂閣屋堂堂堂館

